



定本 與謝野晶子全集

第十九卷

講談社



定本 與謝野晶子全集



第十九卷 評論 感想集六

昭和五十六年一月十日 第一刷發行

定價 三千五百圓

著者 與謝野晶子

發行者 野間省一

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽二二三

郵便番號二三 振替東京八一三

電話東京〇三〇一三二(大代表)

組版 信每書籍印刷

印刷所 多田印刷株式會社

製本所 大製株式會社

落丁本・亂丁本はお取替えいたします
© 與謝野 光 一九八一年

0395-261296-2253(0) (文事) Printed in Japan

目次

砂に書く

自序	三
個性の竝存	五
批評の過信	二
感情と理性	六
苦悶と解決	三
忙中の閒	四
人の二種の型	七
鐵骨の家	三
女子の活動領域	五
個人の力の限度	三

忙し過ぎる生活	四
一つの安心	四
廢墟の美	三
謂ゆる藝術教育	三
與謝野 光	三
大震後の生活	三
危險事實	三
奢侈の本能	六
宗教に對する想片	六
師 弟	七
女子の高等教育	七
職業に就て	七
我國と露西亞	八
古典の研究	八
世界を知ること	八

中等教育の缺陷	八九
支那に關する知識	九三
批評の流動性	九七
生活の自省	一〇一
威壓と粗野の外へ	一〇四
犯罪に就て	一〇七
凌辱と暴行	一一〇
一つの抗議	一二五
官人と老人	一二八
政爭の傍觀者	一二二
政界の老人達に	一二三
普選案の犠牲	一二六
政界の局外觀	一二九
日本に敵無し	一三三
米國に對して	一三六

極度の軍備縮小	一三
一つの初夢	一四
諏訪の旅	一四
雛祭の日	一五
史談	一五
讀書の習慣	一五
人間的記錄	一六
女子の洋裝	一六
結婚の自由	一六
我國の娼婦	一六
人の外的印象	一七
進化の道程	一七
思想家の自殺	一七
漢字制限に就て	一八
文部省の新假名遣に對する抗議（一）	一八

文部省の新假名遣に對する抗議(二)	一九三
女子中の新人	一九六
郊外散歩	一九九
若き人人へ	二〇三
女子の高等教育(再び)	二〇六
親として	二一〇

光る雲

自序	二二五
自由思想家	二二七
人の素質	二三〇
個人の力	二三四
女も一人前に	二三六
勤勞生活へ	二三三
個性を生かすこと	二三五

女子の現代的覺悟	二二六
男女の平等な協力	二二四
速成の惡風潮	二二五
三つの心理	二二八
夏の一日	二二五
小室愛介さん	二二五
讀書、蟲干、藏書	二二九
中元雜談	二三三
若さと忙しさ	二二六
青年の威力	二二九
人口増加の問題	二二六
女子の斷髮	二二二
中等學科の改革	二二四
一つの眞實	二二七
夏と讀書	二九〇

氷	二九三
現代の多事多難	二九六
優秀なる女子	二九九
一つの覺書	三〇二
日本人として	三〇七
譯名と國語	三一
女子教育の方向	三四
左右田博士	三七
芥川さんの事	三〇
人生の歸趨とは何か	三三
女子の研究心	三六
女子と容色	三九
時が欲しい	三三
反動時代に入る	三六
小島烏水氏	三九

自己を放つ	三三三
日本人の一轉機	三三七
私の政黨觀	三五〇
誕生日	三五三
押韻詩の試作	三五六
私達の詩歌	三六一
暴力の否定	三五五
大人の修養	三六八
思想上の眼界	三七三
魯へ歸る孔子	三七五
現代超越の心	三七九
學生と暑中休暇	三八三
熱海ホテルの二日	三八六
私の生活	三八九
新官人氣質	三九三

初夏の旅	三九六
普選直後の所感	四〇〇
無産者の黎明期	四〇三
無産大衆の思想	四〇六
大石主税	四一〇
草園の一日	四一四
輿論の威力	四一八
夏季と衛生	四二二
軽率な漢字省減	四二四
假名遣に就いて	四二七
秋の印象	四三三
猿の座談	四三六
生存競争の脅威	四四〇
郊外より	四四三
勤勞の生活	四四六

新聞雑誌の誤傳……………	四五〇
少年少女の讀物……………	四五三
娼婦問題……………	四五五
正月と遊び……………	四五七
國語と假名……………	四六〇
生活苦……………	四六四
階級鬭爭に反對す……………	四六七
無產子女の方向……………	四七〇

解 題
解 說

編 集 部
木 俣 修

装 幀
アド・ファイブ

砂
に
書
く

自序

「砂に書く」と私の感想集の第十二編を名づけました。砂の上に書いた文字は雨が洗ひ去り、風が吹きちらしてしまひます。おなじやうに、私の書くものも極めてはかないものであることを私みづから知つて居ます。

これには、最近滿二年の間に人から求められて書いた、折折の感想の中から、六十一章を選んで收めました。

私は之を以て、私の尊敬する以前からの讀者達へ、また私のなつかしく思ふ新しい讀者達へ、私の近況を報じる手紙に代へたいと思ひます。

猶この書もまた、私の二十年ぢかい親友である、北原鐵雄さんの特別の厚意に由つて世に出るものであることを感謝します。

一九二五年七月

與謝野晶子

